opusdei.org

## 属人区長の書簡 (2011年10月)

オプス・デイの創立記念日を迎えるにあたり、属人区長は、1928年10月2日に聖ホセマリアの魂を捕えた礼拝と感謝の思いについて考察します。

2011/10/08

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに! 明日は、神の光が真昼のように創立者の心を隈なく照らしてくださった時を、改めて記念する日です。 Domine, ut videam!, Domina,

ご存知のように、創立者は黙想会の 最中でした。三日目の午前中、ミサ 聖祭を捧げた後、ここ数ヶ月および 数年前から書き留めていたメモを読 み返しつつ、祈りを続けていまし た。それは、創立者に依頼すること

を視野に入れつつ、主が与え続けて こられた光でした。そのときまで、 聖ホセマリアの頭の中にあった自分 に対する神の望みは漠然としたアイ デアだけで、正確に把握することの できないフラッシュの光のようでし た。何であるかは分からない神のそ の御旨を、徹底的に果たす心積もり を育んでいました。そして、突然、 あの断片的な光、神の望みの兆候が 明確になったのです。「あのメモを 読んでいる時に、〈オプス・デイのす べてについて〉の光を受け取りまし た。感動した私はひざまずき、主に 感謝を捧げました。説教の合間のこ とで、自分の部屋にいたのです。今 でも、その時、天使の聖母教会の鐘 が鳴り響いていたのを感動のうちに 思い出します。 | [i]

聖ホセマリアの最初の反応は、この 直筆の文章から分かるように、自身 全体が受けた深い衝撃を具体的な外 的行動に表したものでした。すなわ

ち、ひざまずいて神の計画を礼拝し たのです。なぜなら、ベネディクト 16世が述べられたように、「祈り は、ひざまずくという行為のうちに そのもっとも典型的な表現を見いだ す | [ii]ものだからです。このように 振る舞うことで、人間は神を絶対的 に必要としており、神なしでは、無 であって、何もできないことを認め るのです。この自覚のうちに、神か らの恵みを受けた人は、「自分がそ のみ前にいる存在に全身全霊で向か います。自分の心を神秘へと向かわ せます。この神秘から、自分のもっ とも深い望みが満たされ、生活の貧 しさを乗り越えるための助けが得ら れることを待ち望むからです。 [iii]

この神のみ旨を素直に受け入れ、オプス・デイの歩みを始めた創立者は、心から謙遜でありました。この時のことを思い起こし、オプス・デイは人間の才覚によって生まれたのではな

く、神からのものであることがはっ きりとするように、不釣合いな道具 として自分をお使いになったのだ と、何度確言されていたことでしょ う。ある時、「それはあたかも、あ る人がテーブルの足を使って、細密 で素晴らしく美しい文字で書きあげ ることのようです」[iv]と言ってお られました。神が心に入り込まれた あの時のことを思い起こし、創立者 はコメントされました。「イエス・ キリストは、許可を求められること なく、私の生活に入り込まれまし た。主はお出でになり、そこに陣取 り、あれこれと指図されました。そ して私は…、ロバのように従っただ けです。主は全被造物の主ですか b.

あなたたちには、一人ひとりの自由 を尊重しつつも、人々がより良い人 になれるように、すべての人々の生 活に入り込んでいく権利がありま す。時には喜んで迎えてくれないこ ともあるでしょうが、別の時にはあなたたちを探すでしょう。はっきりしているのは、そうるすことがキリスト信者の権利であるだけではなく、義務でもあるということです。 『あなた方は行って、すべての民を私の弟子にしなさい(マタイ28,19)。』」[v]

イエスの弟子である私たちが、神か ら託されたことの偉大さと自己の卑 小さを考えると、次のように自問す るのは何も特別なことではないで しょう。神がこのような仕事をする ために私を起用しようと考えられた のはどうしてなのか。何者でもな く、徳も手段も持たない私を、どう して召し出されたのだろうか。この ような時には、聖ヨハネの福音書を 読み、「生まれつき盲目の人が癒さ れる場面」を黙想するようにと、聖 ホセマリアは勧めていました。「イ エスは土と唾で泥を作り、見えるよ うにと盲人の目にその泥を塗られま

した(ヨハネ9,6参照)。主は点眼薬 として、わずかな泥をお使いにデインで、カザかな泥をオプス・でス・カーでは、オプス・にだって、次のようになって、次のようになって、ではましたが、それはするが、では、では、では、ないまとなったものでは、ないでは、ないでは、でして、人間的なのです。」[vii]

特に、自分の惨めさを隠すことな く、同時に神から愛されていまることを子えしていまっていまっていまった。 あることを祈りの時にが多っていまからとと祈りのがある。 から変わります。だっているがいます。 変熱の働きになる人を聖こなのです。 「祈りは心を神に向けて開 き、高く上げることです。こうして がりは神との個人的な関係とならります。たとえ人が自らの創造主を忘れても、生きておられる真の神は出ます。 第一に、祈りによる神秘的な出で記されず、 なと人間を招き続けます。」 [viiii] 神と一対一で話すため、いつものますに遅れずに赴いていますの。この祈りの時をたとえ一分でも無駄にしないよう努めていますか。

ベネディクト16世は、一般謁見にお いて行われている祈りについてのカ テケージスの中で、この側面を詳し く説明しておられます。太祖ヤコブ が、兄エザウに対面しようと浅瀬を 渡る前に、見知らぬ人と暗闇で戦う 神秘的なエピソード[ix]を考察し、 教皇は、『カトリック教会のカテキ ズム』にある「教会の霊的伝承によ ると、この物語は信仰の戦いである 祈り、また堅忍の勝利である祈りを 象徴するもの」[x]であることを思い 起こし、こう解説しておられます。 「聖書のテキストは、神を尋ね求 め、神の名を知り、そのみ顔を見よ うと奮闘する、長い夜について私た ちに語ります。それは祈りの夜で す。祈りは粘り強く、堅忍をもっ て、祝福と新しい名を与えてくださ

て、祝福と新しい名を与えてくださるよう神に願い求めます。この新しいあり方は、回心とゆるしの実りです。| [xi]

執拗さを堪忍してください。〈祈り の戦い〉に堅忍しましょう。父なる 神とのこの対話の時間を、決して、 どんな理由があっても、ないがしろ にしたり、見下したりしないでくだ さい。私たちの長兄であるイエス・ キリストとの対話において、天の父 との付き合い方を教えていただき、 神の愛で私たちの心を焼き尽くそう とお望みの聖霊に来ていただきま しょう。神の御母、そして私たちの 母であられる聖母の取次ぎにより頼 みましょう。聖母は祈りの先生で す。また、聖ヨセフ、守護の天使と 聖人たち、特に聖ホセマリアに頼み ましょう。聖ホセマリアは教えと模 節によって、社会の真っ只中で観想 者になる方法を私たちに教えてくれ たのです。

創立者が、1928年10月2日に書き留めた内的な出来事に、再度思いを馳せましょう。示されたことを書き留めた後、ひざまずき、そのとき明ら

かになった神のご計画を崇敬し、深い感謝に満ちてこう付け加えておられます。「神に感謝した。感動のうちに天使の聖母教会の鐘の響きを思い出す。」[xii]

すべての善なることは神からもたら されることを知っている人において は、何も自分自身のものであるとは 考えず、感謝と崇敬が同時に表明さ れます。貨幣の両面が切り離されな いのと同じです。それゆえ、10月2 日と、オプス・デイの歴史において決 定的な神からの介入があったもう一 つの記念日である2月14日を、オプ ス・デイにおける深く恒常的な感謝を 捧げる日とされたのです。創立者が 感謝をどのように表しておられたか 知っていますか。多くの償いを捧げ ておられたのです。

私たちも感謝に満ちた心で主に向かいましょう。また、10月6日も感謝を捧げる絶好の機会です。聖ホセマ

リアの列聖は、創立者のように真の 聖性に達することができることを私 たちに思い起こさせてくれます。創 立者は、日常生活のあらゆる状況の 中に拓かれた聖性の小道を、来る日 も来る日も忠実に歩み続けられたの です。

確かに、この目的を達成するには、 私たちを神の愛から引き離し得るす べてのことに対して、絶えず戦うこ とが必要です。この戦いによって、 私たちは主と個人的に交わるための 強さと力を取り戻すのです。ヤコブ の夜半の戦いは、「信じる者にとっ て、神との関係を理解するための基 準となります。 (…) 祈りは信頼す ること、象徴的な意味で神の間近に 近づくことを必要とします。この神 は、敵対者でも敵でもありません。 つねに神秘のうちにとどまり、祝福 をもたらす主です。 (…) そのた め、聖書作者は戦いという象徴表現 を用いました。戦いは、魂の力、望 むものに堅忍と粘り強さをもってもこうとを表します。となることを表しますの関係であるとの関係であるな神との関係であるな神のであるが神いは必ずや、自分の無力さを認めるの無力はいばないであるに達します。神のもというないにはいるのになるの無力なが勝利を収めるのです。 [xiii]

聖ホセマリアは、1928年10月2日に、オプス・デイを〈見た〉まさにそのとき、天使の聖母教会からされるとき、褒め称えて届きま元で鳴りた。創止、とを養が耳に届がするとはいれました。「xiv」とないましたのではは思いたはは思いたとを熱しているとがいるようとない。「変をあった。」という望んではいるよう望んでいるよう。

ます。もうほとんど半世紀になろうとしていますが、天使の聖母教会の鐘が私の心に、喜びと霊的な不寝番を植え付けたように。」[xv]

8月末には、アフリカ旅行のため中 断された健康診断を続けるためパン プローナに行かなければなりません でした。同じ月の23日に、そこから トレシウダに〈抜け出しました〉。 トレシウダには、唯一破壊を免れた 天使の聖母教会の鐘があります。そ こで私はできる限りの時間を聖堂で 過ごそうと思い、聖体の小聖堂で午 後の念祷をしました。あなたたち皆 と一緒に、創立者が勧めたように、 私たちの献身をより良いものとする ため、キリストの完全な奉献を学び 取ることができるよう主に願いまし た。私たちにはそれができること を、心の底から確信してください。

聖母は、オプス·デイの歩みのあらゆる岐路にいつも立っておられまし

た。ですから、私たちが聖母を通し て神への感謝を奉げるのは当然なこ とです。いつも、そして特に聖母の 祝日にはその取次ぎにより頼みま しょう。今月は色々な聖母の祝日が あります。10月7日はロザリオの聖 母、12日はピラールの聖母の祝日で す。創立者は幼いときからピラール の聖母への信心を持ち、神学生時代 は毎日のようにそこを訪れていまし た。そして、Domina. ut sit! 聖母 よ、成就しますようにと、内的に予 感していることが実現されるように と聖母に願っておられました。ま た、1943年10月11日のことも忘れる ことはできません。当時、その日は 神の母聖マリアの祝日でしたが、こ の日にオプス・デイが聖座から初めて の認可を受け取ったのです。

今年10月22日に典礼上祝うことができる福者ヨハネ・パウロ二世を思い起こしつつ、全幅の信頼を持って聖マリアに申し上げましょう。聖なる

教皇と愛する創立者がそうであった ように、Totus tuusすべてあなたの ものでありたい、と。この祝日を、 教会とオプス・デイを助けてくださる ように、ヨハネ・パウロ二世の取次 ぎを頼みつつ教皇のために祈るため に、活用することにしましょう。そ して、私の意向のためにも祈ってく ださい。

心からの愛情を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2011年10月1日

[i] 聖ホセマリア、「内的覚え書き」 306(1931年10月2日)。A・バスケス・デ・プラダ、『オプス・デイの創立者』第一巻293ページ。(邦訳未刊) [ii] ベネディクト16世、2011年5月 11日一般謁見の講話。

[iii] 同上

[iv] 聖ホセマリア、1973年12月31日 家族の集まりのメモ。

[v] 聖ホセマリア、1970年5月18日家 族の集まりのメモ。

<u>[vi]</u> 聖ホセマリア、1957年9月29日 手紙16。

[vii] 同上。

[viii] ベネディクト16世、2011年5月 11日一般謁見の講話。

[ix] 創世記32,22-32参照。

[x] 『カトリック教会のカテキズム』2573。

[xi] ベネディクト16世、2011年5月 11日一般謁見の講話。 [xii] 聖ホセマリア、「内的覚え書き」306(1931年10月2日)。A・バスケス・デ・プラダ、『オプス・デイの創立者』第一巻293ページ。(邦訳未刊)

[xiii] ベネディクト16世、2011年5月 25日一般謁見の講話。

[xiv] 聖ホセマリア、1934年2月14日 『指導指針』註9。

[xv] 聖ホセマリア、1974年2月14日 手紙1。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2011nian-10yue/ (2025/12/15)